

# 北京の元代石刻～その残り方～

松田 孝一

1993年8月に筆者は『北京名勝古迹辞典』(1989年、北京燕山出版社、以下『辞典』)を参考に、北京、主としてその郊外に残存する元代の石刻や建築を見て回った。『辞典』には、元碑として、

## I. 北京西郊の門頭溝区

- ① 白瀑寺(田庄郷淤白村)「大都宛平金城山白瀑寿峰禅寺産業之記」(元貞2年)  
[p. 406] (森田 23)
- ② 仰山栖隠寺(妙峰山郷南桜桃村)「満禅師道行碑」(趙孟頫撰) [p. 410]
- ③ 後桑峪村天主教堂(軍響郷桑峪村)に関わる同村の1対の「石獅子像上の元代題刻」 [pp. 410-411]
- ④ 靈岳寺(齊堂郷白鉄山)「重修靈嶽寺記(至元30年)」 [p. 416] (森田 21)
- ⑤ 通仙觀(清水郷燕家台村)「重修通仙觀碑銘并序(至元28年)」 [p. 426] (森田 19)
- ⑥ 崇化禅寺碑(門頭溝郷城子村)「龍門山清水禅寺記(至正4年)」 [p. 431] (森田 80)

## II. 房山区

- ⑦ 十字寺(車廠村)「大元勅賜十字寺碑」(至元20年) [p. 454] (森田 103) <sup>(1)</sup>
- ⑧ 靈鷲禅寺(坨里郷北車營村谷積山)「大元勅賜上万穀積山靈巖禅寺碑(至正7年)」  
[p. 473] (森田 82)
- ⑨ 瑞雲寺(史家營郷曹家房村)「故大元禅師通圓懿公功德碑并序」 [p. 497] (森田 1)

## III. 平谷県

- ⑩ 隆禅寺碑刻(王辛庄郷太后村)「大徳元年碑」「大徳三年碑」 [p. 580] (森田 27)

## IV. 大興県

- ⑪ 「高信神道碑」(于垩郷魏各庄村) [p. 610] (森田 42)

の計11碑が見いだされる<sup>(2)</sup>。

93年はこの11ヶ所のうち⑤⑥⑦⑧の4ヶ所をめぐって、⑥を除く、⑤⑦⑧の元碑を見学した。またこの見学の途中、北京市内のイスラーム寺院である礼拝寺(宣武区牛街)内にかまぼこ型の石棺を見た。そこにもともとあったアラビア文の元碑<sup>(3)</sup>はすでになかったが、碑の拓本写真が墓石の奥に掲げられていた。また中国仏教協会の表示がある法源寺(唐代の憫忠寺の後身)で、「福寿興元觀聖旨碑(蛇年/年次不明)」(森田 114)、「大蒙古国燕京大慶寿寺西堂海雲大禅師碑記(憲宗5年/1255年)」(森田 5)の2碑にも遭遇した。

<sup>(1)</sup> 『北京日報』1993.7.21 付け記事「全国僅存景教遺物、三盆山前十字寺」(山口政子氏の教示による)、徐蘋芳「北京房山也里可温石刻」(『南京博物院藏宝録』香港三聯書店、1992、pp. 263-264)に  
関連記事。

<sup>(2)</sup> 辞典にはこれ以外にも広化寺(西城区) [p. 106] でかつて元碑が出土したが現存しないなど若干の元碑が採録されている。

<sup>(3)</sup> 碑は1280年と1283年のもの(劉東声・劉盛林『北京牛街』北京人民出版社、1990)。

北京地区の石刻の現状に関しては、その後、2002年に、森田憲司氏が「北京地区における元朝石刻の現況と文献」（松田孝一編『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』[平成12～13年度科研費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書、2002]）で、網羅的に収集された成果を掲げられている。上記の（森田\*）は、同氏の番号を示している。

『辞典』によっても、また森田氏の労作によっても、北京とその周辺には意外なほどに元碑が少ない。元碑は筆者が1991年以来、数回巡った中国北部におびただしく残存し、また碑刻を収集した書物に記録されている元碑の数もこれまた膨大な数に上る。それと比べると、北京の元碑は少なすぎるという印象が強い。残っているのは、郊外の山中の寺院、道観の類である。北京市内でも法源寺の上記2件の碑文はもとからあったものではなく、いずれも他所から運ばれてきたもので、そのうち森田48、114は近年の北京の建設工事で地下から掘り出されたものである。きちんと立って残されている碑文は北京市内では、護国寺、東嶽廟、孔子廟などきわめて限られている。

北京はいうまでもなく元代の首都大都の後身であり、元朝政府の官庁、勅建寺廟がかつてあり、当然それらに関わる碑刻の類も本来多数存在したはずであろう。それらのほとんどが消滅してしまったのではないかとの印象を覚える。

この状況を説明する史書の記事として、一例だけであるが、明初に元碑が破壊されたことを示唆する記事がある。『明史』巻152、王英伝に、

（永楽）二十年扈從北征。師旋、過李陵城。帝聞城中有石碑、召英往視。既至、不識碑所、而城北門有石出土尺餘。發之、乃元時李陵臺驛令謝某德政碑也、碑陰刻達魯花赤等名氏。具以奏。帝曰「碑有蒙古名、異日且以為己地、啓爭端」。命再往。擊碎之、沉諸河、還奏。帝喜其詳審、……

永楽20年(1422)に王英は永楽帝の北征にお供した。軍隊の帰還の際、李陵城を通った。永楽帝は、城の中に石碑があることを聞いて、王英を呼び、見に行かせた。王英は行って見たが、碑文の在処がわからなかった。城の北門に石があり1尺余りが地面から出ていた。これを掘り起こしたところ、碑文は元代の李陵台の駅長、謝某の徳政碑であった。碑の裏にダルガチなどの氏名が刻してあった。そこで永楽帝に申し上げたところ、帝は「碑にモンゴル人の名前があるなら、後日モンゴル人たちが自分たちの土地だとして、もめごとのもととなりかねない」と言い、「もう一度現場へ行って（碑を処分せよ）」と命じた。（王英は行って、）碑文をこなごなにし、それを河に沈めて、もどって報告したところ、帝はその行き届いた処置を喜び、……

とあり、碑文があると聞いた永楽帝は、それを調査させ、モンゴル人たちの氏名の刻されていると知るや、その碑文が、モンゴル人たちとの土地争いの根拠となることを恐れて、碑を処分させている。

明は元朝政権をモンゴル高原に追払って中国を統治した。3代目の永楽帝(1402-1424)は繰り返しモンゴル高原へみずから軍隊を率いて遠征しており(1401, 14, 22, 23, 24)、上記の記事は22年の第3回のモンゴリア親征の帰途のことである。李陵台駅は元の上都の南にあった駅で、元の駅伝路線では、漢地の駅の最終駅であり、明

でも北直隸の北端にあたり、モンゴル人の領域との接点に位置していた。一般に、碑の裏面には、碑の内容とか建立に関係した人物の名が刻される。地方行政のトップであるダルガチ以下の官僚の名が列記されていることも多い。

モンゴル人と漢人世界の接点の場所では、碑の存在は土地所有権の主張の根拠となる可能性もあったかも知れず、永楽帝の危惧もあながち杞憂ではなかったかもしれない。永楽帝は元の碑文の存在に対して相当に神経質になっていたことが上記記事の冒頭の内容からも窺われ、他の元碑に対しても同様の破壊を行なわせたことは十分に推測される。

ところで、1984年北京南郊の大興県の榆垓鎮（『辞典』では于垓郷）魏各庄という村で「高公神道碑」（上記⑩、森田 42）という元碑が発見されている。この碑は『辞典』によれば直立した状態で土中に埋め込まれていた。現在、碑は大興県の文物管理所に収蔵されている。碑文の内容は、肖紀龍・韓永「高公神道碑及瘞藏析」（『北京石刻擷英』[京華博覽叢書、中国書店 2002] pp. 112-116）、で解説されている。<sup>(4)</sup>

それによると、主人公高信は、元朝異様局の総管同知にまで出世し、1288年（至元25年）に死去した人物である。彼はシャマン儀礼用「火浣布」製品、チベット仏教関係織造品、宮殿の敷物、ネストリウス派関係の文字を織り出した軸物など、主として宗教関係の特殊織造品作りの名工で、フビライの賞賛をしばしば得た人物であった。

解説では碑文が証拠となって明から高家が処断されることを恐れて、碑は埋められたのであろうと推測している。碑が直立して埋められ、乱暴に埋められた状況がないところから判断すると、この推測は十分ありうると考えられる。前記の永楽帝の所業と表裏の関係に見える。李陵台駅長の謝某の碑が埋められていたのも明の追求の手を逃れるためだったかもしれない……。

永楽帝を元碑破壊に駆り立てたのは、モンゴル人との土地争いを恐れただけのことなのか。それとももっと大きく明政権の非合法性を隠蔽するためだったのか。もし後者であれば破壊は全国の元碑に及んだかもしれない……。永楽帝は、即位前に燕王として北京にいた時代からせつせと元碑を破壊してまわらせていたのであろうか。

（まつだ こういち 大阪国際大学）

---

(4) 森田憲司氏の教示による。本書によれば、この碑は1984年の北京文物総合調査の際に、大興県の魏各庄村の西北1kmで掘り出された。その際、碑頂が地面に出ており、真南を向いて埋められていた。碑高2.15m、幅0.87m、漢白玉製で、碑座はなく、碑首に雲竜花紋が彫られ、「奉訓大夫故高公神道碑」と篆額されていた。

また、筆者は2001年9月に村岡倫氏と大興県を訪問した。この碑を掘り出し文物局に車で運んだ農民と畑の中で出会い、掘り出した場所などを教示されたが、大興県文物管理所には時間が遅く入れず、碑を実見していない。